

胃精検で差が出る高品質画像が 内視鏡センターを支援 機能を絞り専用機としても導入しやすく



内視鏡センター長 診療部長
消化器科部長
重松 忠 先生

E RCPや胃の精密検査など 内視鏡センターでの診療を支援

当院は滋賀県の湖南地域にあり中核病院として地域の方々に信頼される病院造りに取り組んでいます。また、第3次救命救急指定病院に指定され、地域の救命救急センターとして重要な役割を担っています。そのため消化器救急疾患の搬入が多く、24時間体制で緊急内視鏡治療に対応しています。

内視鏡センターでは2台のX線テレビ装置を検査に合わせて使い分けており、FLEXAVISIONでは画質の良さを活かし主に上部消化管の検査と治療を行っています。具体的には、胃の精密検査や透視を必要とする胆道系のアプローチ、結石や黄疸、緊急の感染症である胆道感染症や腫瘍閉塞の治療などに使用しています。検査件数ですが、最も多いERCPなどの胆道系のアプローチが1日2例程度、その他には胃ろう増設術が週に1~2例と、その交換が週に1~2例程度あります。

胃 精検時に差が出る高品質画像 デジタル処理がさらに診断を支援

画像がきれい、胃の粘膜像ではその良さがわかります。精密検査時に差が出ますね。また、ハレーションが少なく、被写体を外してもそれ程気にならなくなりました。デジタル専用タイプを導入しているため、検査中は撮影条件をオートにしても後で画像補正ができるため、技師がいなくてもほとんどの検査に対応できます。例えば、胃透視や、膵管を微妙に見たいとか、膵管造影評価、癌の診断などでシャープな画像が欲しい場合は撮影後に画質調整を行い、診やすいコントラストや濃度に調整します。些細な違いですが、情報量はずいぶん変わります。また、同じ画像でも何枚か濃淡をつけて出力したいという場合もあります。良い画像を得ることは重要であり、見たいところに合わせて微調整できるデジタル画像は非常にメリットがあります。その他にも、診断後の画像保管や、学会活動、研究活動などでデータを利用できるため便利です。今回、内視鏡センターにもPACSが導入されましたので、従来患



者さんへの説明用に作成していたフィルムも必要なくなりました。フィルム作成のコストや収納スペースはどこももうパンクしていますので、これからデジタル化は必須でしょう。

内 視鏡などの周辺機器が 置きやすいコンパクト設計

この装置を使用して次に感じたのは装置がコンパクトになったということです。以前の装置に比べ検査スペースがずいぶん広くなり、例えば内視鏡の他にも通電装置やガイドワイヤー関係、採取管や、イレウス管の挿入時に使用する器具など、結構な数の小道具を使用するのですが余裕を持って置けます。

また、この装置のように天板が固定されていると患者さんへの安全性も高いと思いますし、装置を動かしたときに周辺の機器や小道具に当たる心配も少なくて済みます。

高 齢の患者さんやスタッフに 優しい寝台昇降機能

寝台の昇降機能はある方が便利です。当院は高齢の患者さんが多いのですが、寝台を低くしてあげることで楽に乗り降りを行っていただけます。また自分で寝台に乗れない方はスタッフ2~3人で介助しており、寝台が低い方が乗せやすく、スタッフの負担も少なくなります。さらに、長時間の検査や治療の時に、医師の楽な体勢に高さを合わせることができいいですね。

専 用装置が複数台必要な病院にも 目的に合わせてシステム構成可能

この装置は必要な本体タイプや機能を選択することができ、目的に合わせて多目的装置にも専用装置にもシステムを構成できるそうですが、当センターでは内視鏡センター専用ということで機能を絞り導入し満足しています。現場では、多機能な高級機が1台あるだけだと取り合いになることも考えられますので、緊急対応に備えて機能分化させ台数を確保することも病院にとって必要だと思います。



導入を
お考えの先生への
一言

コンパクトなうえ天板が固定されているので、診療に必要な周辺機器も室内に装備しやすく内視鏡室に最適です。また、多くの機能から目的に合わせてシステム構成できるので、病院での専用装置として複数台必要な場合にも導入しやすい装置です。